

伊根町舟屋群保存計画 Ine-cho Funaya group storage plan

佐藤信治¹, ○衛藤成波²
Sinji-Sato¹, *Seia-Eto²

Japan's vacant house number of 2013 is 8.2 million units, vacancy rate is a record high 13.5% and the past. This vacant house problem by we continue to break the beautiful landscape of many of the town. And also vacant house now more followed and continue the historic cityscape and landscape, such as a conservation district of traditional buildings will also be expected to go any collapse. also only Funaya group of important traditional buildings Ine-cho, has been certified as a storage area in the fishing village without exception, it has been a serious vacant house problem. vacancy rate overall 10% of Funaya, future vacant house reserve army is close there is also a 40% vacant house will also be the 50% of the total. I increase the vacancy rate of Funaya and explore the cause is, we will propose to save the Funaya group that has kept the beautiful sea landscape of Japan.

1. はじめに

2013年の日本の空き家数は820万戸、空き家率は13.5%と過去最高を記録しています。この空き家問題により多くの町の美しい景観が崩れていっています。そしてこれからも空き家は増え続けていき歴史ある街並みや重要伝統的建造物群保存地区などの景観もいずれ崩れていくことが予想されます。漁村で唯一重要伝統的建造物群保存地区として認定されている伊根町の舟屋群も例外なく、空き家問題が深刻化しています。舟屋の空き家率は全体の10%、空き家予備軍は40%もあり近い将来空き家は全体の50%にもなります。私は舟屋の空き家率を高めている原因を探り、日本の美しい海の景観を守ってきた舟屋群の保存を提案していきます。(Figure 1)



Figure 1 Picture of Ine-cho

2. 計画背景

計画地は京都府伊根町です。ここは年中波が穏やかで潮の満ち引きが少ない伊根湾があり、その湾の海岸に舟屋がずらっと一列に並んでいます。その舟屋は、船の収蔵庫であると共に住居の役割も持ちます。舟屋から見る海の景観や生活空間の一部に漁業が溶け込んでいる美しさは、伊根町の代表的な観光スポットとして観光客が多く

訪れます。このことから美しき舟屋群の景観は建築の美しさだけではなく、漁業が住宅に溶け込んでいるからこそ美しいといえます。しかし、現在は漁業人口の減少による深刻な舟屋の空き家問題があり美しい舟屋群が失いかけています。(Figure 2)



Figure 2 Chart of vacant house ratio in Ine-cho

漁業を主要産業として発展してきた伊根町。その町が漁業人口の減少により漁業が衰退してきています。今、伊根町は舟屋のリノベーションや空き家バンクの活用で空き家問題を抑制しようと活動しています。しかし、空き家問題だけ解決し舟屋だけ保存しても意味はあるのでしょうか。漁業を失った舟屋を保存しても、ミイラを保存するのと同じであると私は感じます。全国には「伊根町で漁業をしたい。」という若者が多く、学ぶ環境、暮らせる環境が整っていれば若い漁師を呼び込み、活気ある伊根町を取り戻すことができます。そこで私は、この伊根町に漁業教室を新しく設立し、この漁業教室を活用した舟屋群の新しい保存計画していきます。

1. 日大理工・教員・海建 Department of Oceanic Architecture & engineering, CST., Nihon-U.
2. 日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture & engineering, CST., Nihon-U.

3. 建築計画

現在ある舟屋群に同じ舟屋は存在せず、その持ち主の個性によって少し形やデザインを変えています。これにより美しい海の顔と陸の顔つくられています。この2つの顔に結びつきが無く、個々になっています。昔は漁業が盛んであったため、人が2つの顔の糸になり母屋と舟屋を結んでいましたが、現在は漁業を引退し、母屋のみで暮らす人々が多くいます。機能を失ったミイラ化しないようにするには一連の舟屋群に漁業教室を溶け込ませ、舟屋に新たに学びの場の機能を足してあげます。例えば地図にある赤い印の空き家に Figure 4 のようにボリュームを作り、教室空間にします。屋根を舟屋と同じ切妻屋根にすれば、空いた空間を埋められ景観を保つことができます。また、この教室の建築を陸側のみ左右へ伸ばしていき、隣り合う舟屋との関係性を作ります。関係性を作る理由として、もし隣の舟屋が引退した漁師さんのものであるなら、その人が教師になり勉学の場合は教室で、実習の場合は自分の舟屋で行ってもらいます。隣が現役の漁師さんでも匂が過ぎた時期に臨時の教師になったりできます。(Figure 3, Figure 4)

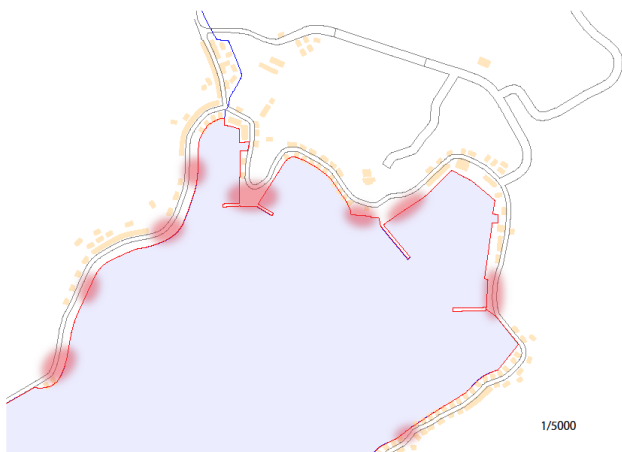


Figure 3 Site in Ine-cho

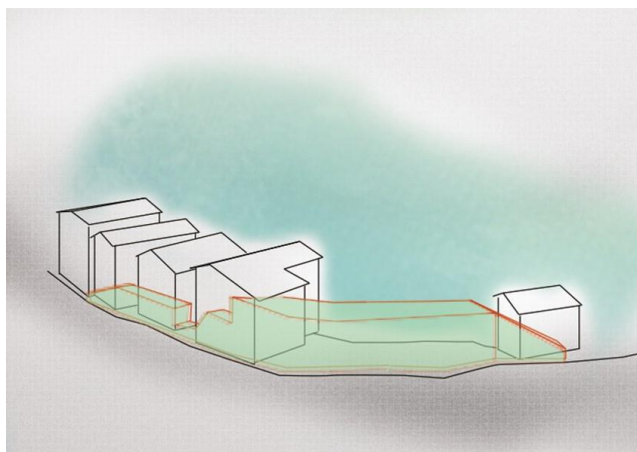


Figure 4 Suggestion image after

舟屋に教室という新たな価値を与えミイラ化を防ぎました。次は個々になっている母屋と舟屋を結んであげる提案です。現在ある道は車で通るのがやっとの狭い道であるので、母屋をセットバックし新たな歩行導線を引きます。新たな導線(オレンジ色)と教室から伸びた廊下(緑色)に渡り廊下を渡してあげます。今まで生活空間は母屋で解決していたものが、2階にいてもレベルを変えず舟屋に移動することが可能になり、生活空間の幅が広がります。舟屋の方を客間や宿泊施設にすることもできるので、母屋と舟屋の行き来が増え、人が2つの建築を結んでいきます。(Figure 5)

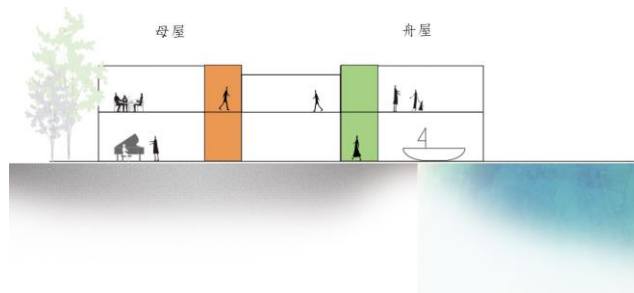


Figure 5 Suggestion section

次に所々コンクリートを引いただけの駐車場や船着き場に連続した切妻屋根を建てて景観を整えていきます。舟屋群の一連が途中で途切れないようにデザインしていき、雪の日でも外に人が集まり、賑やかさを保ちます。また、人のたまり場をつくることによって学びに来た学生と地元の人が交流する場を設けることができ、信頼関係を気づけます。(Figure 6)

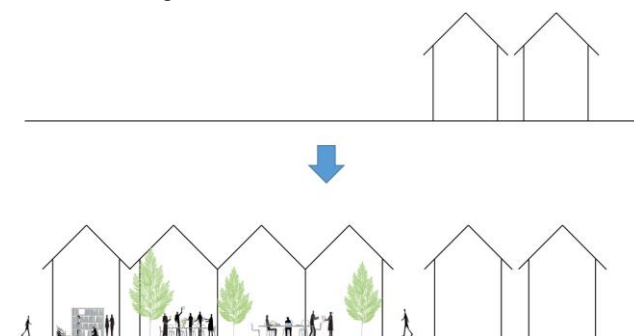


Figure 6 Suggestion image

これらの提案により漁業の活性化をはかり本来の姿を取り戻し、空き家問題をなくしていきます。そして舟屋の本当の意味での保存をしていきます。

漁業学校を建築する。若者の漁業者を増やし、漁業の活発化。学校と舟屋を融合させ、町と漁業の関係性を強化。伝統的な舟屋を良い状態で保存できるよう、これから更なる追求をしていきたいです。